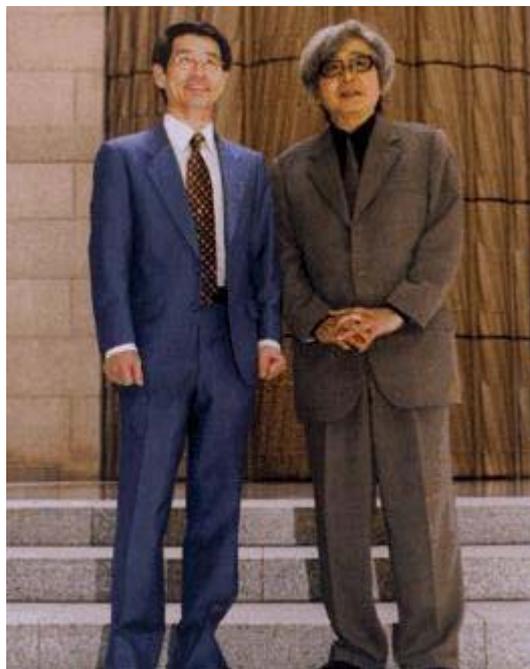


対談「映画の制作と裁判」



最高裁判所事務総局行政局長(判事)
園尾隆司(写真左)

映画監督
山田洋次(写真右)



「映画の制作と裁判」対談全文

時代劇の制作と創造力の鍛錬



園尾

今日は最高裁へおいでいただき、ありがとうございます。

山田

こちらこそよろしく申し上げます。今日は最高裁の法廷や図書館を初めて見せていただきました。図書館の明治文庫はなかなかいい資料を持ってらっしゃるし、時代劇、特に江戸の下町が舞台になる場合の勉強になりますね。

園尾

この度は、本格時代劇初監督映画『たそがれ清兵衛』の日本アカデミー賞受賞、おめでとうございます。藩に仕えつつ苦悩する下級武士の生き方に共感を覚え、深く感動しました。で、その後もう1度見ました。また見てみたいと思う映画でした。

山田

そういう方が多いんですよ。だから、いつまでたっても興行が終わらず、だからといつまでも人が入る不思議な映画でしたね。

園尾

どうして2度見たいのだろうと思って、思い当たったのが古典落語です。あれは何度聞いても、もう1度聞いてみたいと思いますね。

山田

本当にそうですね。

園尾

2度目に見たときに、とても印象に残ったシーンがありました。それは、清兵衛が虫かご商人に、もう少し工賃を上げてほしいと交渉するシーンです。家族のために武士の誇りを捨てて交渉しているのですが、これがすごい迫力でした。どうしてこういう迫力があるんだろうと思ったのですが、最後の字幕に『虫籠作製指導 竹定商店』と出ているのを見て、「ああ、これだ。」と思いました。職人の教えも受けて丁寧に作られた様子が想像できました。私の知り合いの噺家が着付け、小唄、長唄はもとより日本舞踊なども修める姿に通じるところがあるように思いました。

山田



特別気負ってやったわけではありませんが、ともあれ、あの時代の暮らしを僕たちは本当に手に触るようにちゃんと理解しなければいけないし、俳優さんも分かなければいけない。見よう見まねでちょんまげを載っけて刀を差せば時代劇ができるわけじゃないだろうということで、虫かご一つにしても職人を探してきてみんなで一緒に勉強しました。それから、特に子供たち。今の子供は草履一つ履けないので、娘役の2人には1,2か月も前から、毎日学校から帰ったら草履か下駄を履いて、着物を着て過ごしてほしいということでやってもらいました。撮影が近くなると2人を京都に呼びまして、本物のかまどで薪をどうすれば炎が出て、火を落とすときはどうするか、実際にお釜でご飯を何度も炊かせて、大体炊けるようにまでなってもらいました。さらに、拭き掃除をさせたり、お辞儀の仕方とかをしかるべき先生につけて教えるとか、そういうことを勉強する時間をとりました。

従来時代劇というと、最初から「これはうそでしょうがない。」というところがある。でも、そういう割り切り方をしていると、何となく俳優の気持ちまでそらぞらしくなる。例えば、江戸時代の町家の娘がどんな顔でどんなふうな物

言いをしたかということまで一々分かるわけではありませんが、その時代はこんなだったんじゃないか、あんなだったんじゃないかということをもみんなで一生懸命想像しながらやる。そういう努力は惜しまずやろうということでやりました。

園尾

監督は東京大学法学部を卒業されているそうですが、にもかかわらず創造の世界を極めておられるのは大変驚異に思えるのですが。

山田

いやいや、間違っただけです（笑）。法学部にだって1,2パーセントは変なのがいるんですよ（笑）。ただ、僕はいろんないきさつで映画界なんていう全然違う方へ入っていっちゃって、一生懸命創造力を磨く努力をしたということはあるかもしれません。僕がもし一生懸命勉強して裁判官になっていれば、創造力の方は余り伸ばさないで、ほかの能力を懸命に磨いていたんじゃないのかな。ただ、創造力の豊かな人の方が僕にとっては魅力がありますし、裁判官だって、検察官だって、なるべくそういう人たちが多いいいなとは思っていますよね。だって、被告人の気持ちというものを考えるということだって、いわば想像力であり、創造力ですものね。



【やまだ・ようじ】

1931年（昭和6年）、大阪府豊中市出身。少年期を、満州（現：中国東北部）、山口県宇部市で過ごす。1954年（昭和29年）、東京大学法学部卒業。同年、松竹株式

会社に入社（同期に大島渚監督など）。1961年（昭和36年）、『二階の他人』で映画監督としてデビュー。代表作に『男はつらいよ』（1969年）をはじめとする『寅さん』シリーズ、『幸福の黄色いハンカチ』（1977年）、『学校』（1993年）など。本格的時代劇初監督となった藤沢周平原作の最新作『たそがれ清兵衛』（2002年）は、第26回日本アカデミー賞最優秀作品賞、最優秀監督賞、最優秀脚本賞をはじめ、数多くの映画賞に輝く。

新作落語と分かりやすい裁判

園尾

監督は、新作落語の脚本もお書きになっていると聞きますが。

山田

柳家小さん師匠のために新作落語を書いたのは、僕が寅さんをつくり出した後です。寅さんを見て小さん師匠が、この監督は落語が書けるんじゃないかと思っただけなんです。それで、僕にそういう気持ちはないかと言うから、落語少年としては、実は僕はそれこそやりたかったと。で、うれしがつて小さん師匠に会いに行ったら、「新作落語はいっぱいありますが、どうも私は電信柱や郵便ポストのあるような噺はできないんですよ。やっぱり鬚を結って、要するに江戸時代じゃないとできないんで、そういうのを山田さん、書いてくれませんか。」ということから始まったのです。それで、僕は小さん師匠に三つ書きましたけれども、随分打ち合わせをしていたから、その間にいろいろなことを小さん師匠とか小さん師匠の周辺にいる噺家たちから勉強したと思っていますよ。それがその後の寅さんづくりにどれだけ役に立っているか分からない。

【柳家小さん(五代目)】本名：小林盛夫。1915年(大正4年)、長野市出身。1947年(昭和22年)、真打昇進。1950年(昭和25年)、五代目「小さん」襲名。1995年(平成7年)、重要無形文化財保持者(人間国宝)認定。2002年(平成14年)、永眠。

【藤沢周平】本名：小菅留治。1927年(昭和2年)、山形県鶴岡市出身。1971年(昭和46年)、小説『溟い海』でデビュー。1973年(昭和48年)、小説『暗殺の

年輪』で第 69 回直木賞受賞。他に多くの文学賞を受賞。1997 年(平成 9 年), 永眠。



園尾

実は、私も江戸資料館ホールなどで、新作の落語をやることがあります。ただ、毎回新作の噺をつくるのに実は大変苦労してまして、監督が小さん師匠の噺もおつくりになったという話を聞いて、小さん師匠がうらやましいと思いました。

山田

江戸資料館には僕もよく行きますよ。どんな噺をなさるんですか。

園尾

裁判を題材にした新作落語です。私は民事事件ばかりやっているのですが、民事事件の裁判官というのは、判決を書くほか、分割払いの和解を勧めたりもするので、当たりがソフトになります。一方、刑事裁判というのは、民事裁判とは違って威厳があります。

山田

雰囲気からして違うということですね。

園尾

そうです。それで、刑事事件の担当裁判官が風邪で臥せったということで、長年民事裁判ばかりやっている者がピンチヒッターで刑事裁判をやったという設定で話を進めると、これがとても変な具合になります。判決を宣告するとき、「被告人を懲役 2 年に処する。」と言うべきところで、被告人から「家族がいるので長くは刑務所に入れない。」と言われて悩んでしまい、最後に出した結論が懲役刑の分割払い(笑)

山田

それはおもしろい(笑)。僕は最初に新作落語を書いたときに小さん師匠に、

「今まで小さん師匠がやられた落語は全部古典です。中にはせりふの端々までみんな観客が知っているものをおやりになる。これは観客が全く知らないものをおやりになるんだから、随分見当が違うでしょうね。」と言ったら、「それが一番大事なことなんです。我々噺家の世界で昔から言われていることなだけども、『どんな有名な噺を演ずる場合でも、観客は初めて聞くんだという気持ちでやれ』と。そうすると、観客は不思議なもので、初めて聞いたような気持ちになるんですよ。その気構えが大事です。だから、私はこの新作をやるのも、有名な古典をやるのも、気持ちは同じなんです。また、その同じ気持ちでやることに本当はとても大変な努力と工夫、苦心が要るんですよ。」と言われました。それは、寅さん映画をつくり続けていたころですから、「そうか、寅さん映画も大体同じような物語で、寅さんがいて、美人に会って恋して失恋してという形はずっと繰り返しで、観客も知っている。でも、知っていていいんだ。観客は初めて寅さんを見るんだというつもりでつくらないといけない。」と、そんなことを学んだわけです。

園尾

裁判官が分かりやすい裁判をと心がけていると、毎日何件もある事件で、同じ説明を繰り返すことになって、根気がいると感ずることがあります。倒産事件で債権者集会の指揮をする場合なども、毎日10件もの事件で同じ説明を続けていると、いくら分かりやすい裁判を心がけていると言っても、くたびれてくる感ずることがあります。そんなときに、『その道のプロは、繰り返しやる場合にも常に初めてやるつもりでやる』というのはいいい教えになりますね。



SCENE1-CUT2 最高裁判所大ホール



SCENE1-CUT4 最高裁判所の定礎

映画の制作と監督の役割

園尾

今回、山田監督と対談をする予定だと知人に話したところ、「監督が多くの人を束ねてやっていかれるところについて聞いてみてほしい。」という希望がたくさん寄せられました。

山田

映画を監督する仕事とは何かということは、とても分かりにくくて説明しにくいけれども、ものすごく奥行きのある深いことがあると思います。それが、僕は今の映画界の中で一番の問題点で、つまりそれが何か余りにも複雑で分かりにくいから、だんだん消えつつあるといいますか。ですから、僕たちが学ぶことは、こういうふうに演技指導をすとか、こういうふうに撮るとか、こういうところはロケーションがいい、ここはセットがいいとか、そういう言わば具体的なノウハウももちろんいろいろありますが、それ以前の問題がものすごくあります。監督の仕事というのは、どうでもいいような雑事から高い芸術的な判断まで、そして大勢のそれぞれ個性が違う俳優とスタッフに働きかけて一つの創造集団に組織して、しかもこの人たちが創造に向けて自分の力で動き出すという至難のわざをやらなければならないというのが監督の演出ということで、それを学ぶということは、教科書で勉強するようにはできないんですね。

俳優の顔を朝見て「おはよう。」と言って、「あれ、今日はちょっと元気がないな。」とか、「鼻がぐずぐずして、おまえ、風邪ひいているのか？休んだ方がいいぞ。」という、そういうことから始まるわけです。あるいは「今日はちょっと寒いから、ヒーターを持ってきて足元に置いてあげなさい。」とかということだっただけ監督の仕事だし、そんなことから始まっているいろんなレベルがあります。演技指導といたって、その俳優が自信がなくて、思ったような演技ができない。そんなとき、一緒になって苦しんだり、時間をかけて待ってみたり、「今日はうまくいかないから明日にしよう。」とか、あるいは、その人の生い立ちを検証しながら、「君、こういう体験があったらう。そのときに、君、どんなふう

に感じた？」というような話をしてやる。そういう中で彼あるいは彼女が何かふっと心が満たされたときに、「今の演技はよかった。」というふうにとどり着けるとでもいいですか、演技指導一つとってみてもそういうことがいろいろあるわけです。

あるいは、例えば『たそがれ清兵衛』の最初のシーンは葬式なのですが、監督としては雲が欲しい。ところが、自然相手に、「こういう雲が欲しい。」って言えるわけがない。ただじっと見ていて、それで「この雲よくねえな。もうちょっと何とかならないかな…。」って。何とかならないかって、どうなるか分からないんだけど、「今日はやめよう。明日来よう。」なんて…。翌日来て真っ青な空になったら、もうだめなわけでしょう。「こうじゃないんだ。」「じゃあ、どんなのが欲しいんですか？」「こうじゃないということだけは分かるんだ。」ということの積み重ねなんですね、演出という仕事は。



SCENE4-CUT1 最高裁判所図書館



SCENE2-CUT6 大法廷裁判長席

絶望と希望と生きる勇氣

園尾

監督の作品には、いつも民衆の思いやりのある目を感じます。特に、野心を持たないで小さな夢を持っている者を優しい目で見られてると感じます。これがどんなところから出てくるのか、お伺いできればと思います。

山田

僕は中学2年のときに満州から引き揚げてきまして、親戚を頼って、山口県

の田舎で戦後の大混乱の時代を過ごしました。おやじの仕事もないし、食べる物もない。そんな時代に、引揚者というのは、殊さらまた貧乏なんですね。一種の難民みたいなものですからね。敗戦までは、満州は日本の植民地ですから、日本人は割にいい暮らしをしていたんです。それが突然、本当に最下層のレベルのようなつらい生活を強いられて、中学生でもアルバイトをしながら学校に行っていたんです。そのときの体験が僕にとって貴重だったような気がしますね。自分がつらいときは、ちょっとした親切とか、優しい言葉をかけてくれたことがものすごくうれしい。

中学3年のときだったかな、海岸の町でしたから、ちくわとかかまぼこを仕入れて、いろいろな店に卸して歩くんですが、あるときどうしても売れないんですね。これがみんな腐っちゃったらどうしようもないので、駅の近くにある草競馬の競馬場に行ったら、屋台がバーッと並んでいます。そこで「ちくわは要りませんか？」と言ったら、一人のおばさんが「あんた、中学生かい？」と言うんですよ。「はい、そうです。」「こんなことしなきゃ食べていけないの？」と言うから、「僕は引揚者で、おやじが仕事ないものですから…。」と言ったら、「みんな置いていきなさい。あんたね、これからもし売れ残ったら、いつでもおばさんが引き取ってあげるから。」そう言われたとき、僕は何か涙がぼろぼろ出てね、うれしくて。もう昔のことだからそんなに覚えていないのですが、何かそのおばさんがとても美しい人に見えて。多分、実際はそうじゃないと思いますよ(笑)。だけど、色の白いきれいなおばさんだったなというふうに…。その後、余り甘えちゃいけないと思って、そんなに何度も行きませんでしたけれども、行くと、「ああ、来たかい。さあ、みんな置いていきなさい。」なんて。そういうおばさんの言葉というのは、生きることに絶望した少年に生きる勇気を与えるぐらい、一人の少年の生命を救うぐらいの力があると思います。

園尾

そのお話を伺うと、監督がおつくりになった映画のことがとてもよく分かります。

山田

寅さんという人もそうだと思うんです。本当に絶望している人には、「君は間違っているんだ。」というようなことは絶対に通用するわけがないし、あるいは「こうしなさい。」というのも通用しない。まずは一緒に泣いてやるというか、「ああ、つらいね。聞いてるとおれも涙が出ちゃったよ。」と言って。それがまず一番つらい人を助けることだろうと思うんです。その次には、おもしろいことを言って笑わせる。ついさっきまで泣いていた人がくすくす笑っちゃう。寅さんができるのはそこまでですよ。さらに仕事をあっせんするとか、こういうふうに分かたればどうだとか、そういう難しいことはできないんです。頭が悪いから。だけど、あの頭の悪い寅さんでも、一緒に泣いてやって、おもしろい顔をして見せたり、ばかなことを言って笑わせたりすることはできるわけですよ。それが寅さんという人間のこの世における存在理由だと思っています。



次作の構想

園尾

よいお話を伺いました。次作への期待がますます高まります。次作について、何かお伺いできることがありますでしょうか。

山田

そうですね。今、僕は藤沢周平さんの原作で時代劇をもう1回やろうと思っ

ているんですよ。この間は地方の田舎の藩の下級武士だったから、今度は、藤沢さんの作品にあるんですが、浪人を主役にしようかなと思っています。現代で言えば、この間は平サラリーマンですが、今度はリストラされた男ですね。そういう侍を主役にしようかなと思っているんです。

園尾

楽しみにしています。前作は構想 10 年と伺いましたが、そうすると次作の公開までに私も退職しているかも知れませんが(笑)、また深く感動すると思います。

山田

ありがとうございました。